

まず、第五号の1から32までをまとめてみたい。

「今までにも『牛馬に墮ちる』と説かれているが、どのような者が牛馬に墮ちるのか、またその先どのように救われるのかという道理は知らないであろう。この度は、来生のことで今生のうちに知らせておくから、自分の身に起きることをよく見つけよ。それぞれに“自分さえ良ければ”と思う心は必要ない(1～4)。たとえ同じ一つの家でも、親神が善悪を見分けて、それぞれの心通りに守護している。親子でも、夫婦やきょうだいの中でも、それぞれに心は違う。そして、世界中のどの者であっても、心のほこりから身の障りになってくるのだ(5～9)。そこで、自分の身の上で悩むことから自身を省みて、親神を信じ切ってもたれる心になるようによく考えよ。これからはどのような難しい病でも、治らないということはない。すべては、その者の心次第である(10～16)。

もう一刻も早く確かな道に出たい。「つとめ」の役割を担う人材が、その者の身の悩みをきっかけとして引き寄せられるのだ。つまり、身の障りと言っても、それは親神がその者をこの道に手引き、また、その心得違いを改めさせ、あるいは親神のもどかしさを伝えているのであり、皆それぞれに身の悩みからしっかりと神意をたずねてほしい。人間が可愛いくて仕方ないから、難しい事情も与え、厳しい話もするのである。よく考えて、心を定めて神の道について来い。将来には頼もしい道がある(17～24)。

さあ、今までは見許してきたが、これからはどうでもこうでも人間の心を掃除していく。心がすっきり掃除されないことには、親神の心も分からないだろう。この親心が心底分かったなら、この世界を創める働きを現す「つとめ」の手振りを教えよう。だから、近道を求めたり、欲に目がくらんだり、高慢心に陥ることがないように、ただ一筋の本道を歩んでほしい。その道に出たなら、それがいつまでも伝えられるべき、人を救うための基礎となる(25～32)。」

第五号は、「牛馬」という言葉で“報恩を忘れた者”について説き始められ、それから「親子でも、夫婦のなかも、きょうだいも、皆それぞれに心が違う」(5)と家族のあり方にふれ、さらに「世界中」を視野に入れて「心のほこりが身の障りとなって現れる」(6)と説かれている。「牛馬」という言葉は多少目立つ表現ではあるが、『注釈』を読むと、それは人間と牛馬の関係性を示すためというより、当時「牛馬に墮ちる」と一般的に説かれていたことから便宜を図って、「報恩の道を知らない者」を示すために用いられていると考えられる。つまり、ここでは、どのような者も、報恩の道を歩む人間として成り立たせてやりたいという親神の望みが詠われているのだ。そこで、親神は「先なる事(将来、来生)をこの世(現生)から知らせておく」と論じ、私たちが報恩を忘れて“自分さえよければそれでいい”と思うようになることを戒められている。

自分の日頃の生活ぶりを振り返りながらこの冒頭部分を読むとき、親神の“厳然さ”と“温もり”が同時に感じられるのは私だけではないだろう。普通、物事を道理によって判断することと、感情や感覚によって判断することとは異なる営みとして

区別され、たとえばそれは左脳と右脳の働きの区別として説明されることもある。しかし、「おふでさき」に現れている神意を汲み取る上では、必ずしもその区別は有効ではない。「おふでさき」を読むうちに、その神意が物事を関係づける厳然とした道理として理解されつつも、同時にそこに何とも言えない温かみが感じられるからだ。

私にとって「おふでさき」は、当連載を続けるための素材ではない。あるいは、この世の真理を学問的に説明するための研究資料でもない。それは生活のあらゆる場面において、自分の人生に込められた親神の思いをたずねるための手がかりである。生活のどの場面においても私の心臓は一貫して脈打ち、私の心は同じように泣き笑いしている。その意味で、私の信仰生活は教会や教室の中だけにあるのではなく、あるいは職場や家庭の中だけにあるのでもない。それは私の心身がある限りにおいて、ある。そして「おふでさき」の言葉が生身の自分に当てはまるにつれて、親神の前では何も隠せないと感じられ、その度ごとに神意の厳然さと温もりが同時に伝わってくる。私の信仰はまだ途上であるが、少しずつ「神が現れた」ことの重大さが感じられるようになってきた。

さて、10の歌では、私たちが病を患うとき、キーワードは「神にもたれる心」であることが教えられている。たとえば椅子の背に自分の体重をあずけると、私たちは「椅子にもたれる」と言う。それは単に物理的な体重移動だけを意味しているのではない。というのも、「もたれる」という語は、私たちがその動作において自分の“重心”を他に移すことを示しており、とりわけ仰向けになって背中から寄りかかる格好は、見えないものに対する信頼を表していると考えられるからだ。つまり、そこでは心身の抛り所が問題になっており、「おふでさき」は、私たちが病を患う際にはそのような自分の中心を親神にあずけるようにと諭されているのである。

椅子にもたれるとき、自分の重心は椅子が支えるという自明の信頼がある。そして私たちは、病を患ったときには、実際に椅子に腰掛けたりあるいは布団に横たわったりして、自由のきかない自らの身体を他のものにあずけて「もたれる」。しかし、「神にもたれる」とは、さらにもう一步踏み込んだ経験といえよう。すなわち、それは自分の重心を他にあずける以前に、そもそも自分が自分の身体を支えていたわけではないという認識に至ることだ。つまり、私たちは、病床において自由のきかない身体を椅子や布団にあずける中で、実はそれ以前の健康なときにもこの身体は自分が支えていたのではなく、もともとは“大地”によって支えられていたのだと気づく。私たちはそう認識するに至って初めて「神のからだ」と教えられているこの世界に「もたれる」のであろう。親神こそがこの身体を支えているのであり、その神意こそが私たちの生活の中心・抛り所なのである。

病は苦しい。何かにもたれたい。しかし、横になってもまだしんどい。そのとき私たちは「自分の重心は自分が支えている」という思いに縛られて、親神の神意を自分の中心に据えることを拒んでいるのであろう。「神のからだ」のなかで暮らしつつも、私はまだまだそこに「もたれる」ことができずにいる。